

「そこでヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに逃れ、ヘロデが死ぬまでそこにいた。・・・」(2:14、15A)

神様は私達を愛して、救い主イエス様を私たちの世界に送って下さいました。しかし、この救い主の誕生を喜んだ人々は、ほんのわずかな人々だけでした。しかもそれは貧しい人々（羊飼ひ）、異邦人（東の国から来た博士たち）たちだけでした。

多くの人々はイエス様の誕生には無関心でした。救い主がこの世に来られた事を知りませんでした。いや知ろうともしませんでした。

———— サタンは知っていた ————

しかし、サタンは知っていました。この世に救い主が来られた事を一番良く知っていたのはサタンではなかったかと思えます。そして、最も救い主を恐れていたのもサタンでした。サタンは何とかして、神様の人々を救う計画を妨害しようとしてしました。ですからサタンは、イエス様の生まれる前からヨセフの心の中に働き、マリアと離婚させようとしていたり、あのヘロデ王を通して、イエス様を殺そうとしていたり、それだけではありません。それまでの計画に失敗すると今度は、イエス様のその公生涯においても、あの手この手と、サタンは祭司長、律法学者、パリサイ人に取り移って、攻撃の手を休めることをしませんでした。

- 救い主の誕生を
- 1、サタンは他の誰よりも一番良く知っていました。
  - 2、サタンは他の誰よりも一番恐れていました。
  - 3、サタンは徹底的に妨害しようとしてしました。

----- 立って・・・逃げなさい -----

さて、イエス様が誕生してから間もなく、赤子のイエス様の上にヘロデの魔の手が伸びました。明日にでもヘロデの兵隊が、この家に乗り込んで来るかも知れない。そんな時でした。神様はみ使いを通してヨセフに語られました。

(13節)「立って幼子（おさなご）とその母を連れてエジプトへ逃げなさい。そして、私が知らせるまで、そこにいなさい。ヘロデがこの幼子を探し出して殺そうとしています。」

さあ、ここでヨセフの態度に注目してみましょう。

時は夜です。しかも真夜中です。マリアもイエス様もぐっすり寝ています。あたりは物音一つせず、全く静かです。何も起こりそうもない夜でした。

私たちでしたら、そのような時に、唐突に「今すぐ外国のエジプトに行きなさい」と言われたらどうでしょうか。しかも、夢の中にです。実際に困ってしまいます。おそらく、いろいろな事を考えるのではないのでしょうか。例えば、「明日になってからでも良いではないか、産後間もないマリアと、小さな赤ちゃんを連れて砂漠の中を旅するなんてとんでもない、又エジプトには知人もいないし、果たして住む家や、働くところがあるのだろうか？ それから、ナザレの家族にはどの様に連絡を取ったらよいのだろうか。このベツレヘムが危ないのであれば、この町を離れば良いのであって何もエジプトまで行かなくとも・・・、それにしても、あの夢は本当に神様から来たのだろうか。」次から次へと不安はつり、わ

ずらわしささえも感じてしまい、大いに戸惑ってしまうのかも知れませんね。繰り返しますが、ましてや今は真夜中です。しばらく様子を見ようか？

----- 夜のうちに -----

さてヨセフはどうであったでしょうか。14、15節には簡潔に次のように書かれています。「そこでヨセフは立って、夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに逃れ、ヘロデが死ぬまでそこにいた。・・・」

ヨセフは神様の導きに従いました。「夜のうちに」と書かれています。彼はあたたかな布団から、はね起きてすぐにマリアを起こしました。身支度（みじたく）をさせました。そして、何のためらうこともなく、その家を後にしたのでした。それにしても回りの人々からは、この一家、まさに「神隠し」にあったように思われたことでしょう。一夜のうちに、ヨセフの家族がいなくなってしまったのですから。

でもヨセフは神様のことばによって悟りました。「ここにはいけない。ここは世界中で一番危険な場所だ」と。同意したマリアも立派でした。今、夫婦がみことばに従ったのです、信仰に勝利したのです。

----- 神の時 -----

それにしても このヨセフのみごとな決断、その機敏な行動、私たちは 見習わなくてはなりません。私たちはとかく待たなければならない時に腰を上げてしまい、腰を上げなければならない時に落ち着いてしまうということがあるのです。熱心に主に仕えている様に見える人でも、ここ一番で抜けていたり、的はずしてしまうことがあるのです。

神様の計画には時があります。ですから、その時を逃さないで、神様からの命令には有無を言わず黙って従うことが大切なのです。

繰り返しますが「ヨセフは立って夜のうちに」出かけました。私たちもみことばによって聖霊に迫られているならば、すぐに主権を主に明け渡して、主にゆだねて従いましょう。

----- 失敗を繰り返さなかったヨセフ -----

さてこの所に、ヨセフの大きな信仰の成長をみます。

ヨセフは2度と失敗を繰り返しませんでした。1度目は離縁しようとしたヨセフです。しかし、もう同じ失敗はしませんでした。

それにしても、やはり家族の命を守る全責任は夫にあるのではないのでしょうか。神さまも二人が結婚してからはマリアではなく夫のヨセフに語りかけています。父親が神様に従うことの大切さを示されました。それにしても神様に従うのが一番安全な道です。御旨の中が一番安全なのですね。ヨセフの信仰がイエス様を守りました。家族を、世界中の人々を救いました。

また、ある本に「博士たちが献げた黄金、乳香、没薬などは、ヨセフ一家のエジプトへの旅費や生活費になったのではないか」と書かれていました。実は神様は「逃げなさい！」と言われる前に、十分に準備を整えてくださる神様なのでした。いたれり尽くせりですね。

—— 従い続けたヨセフ ——

そして、ヨセフはこの時以来、ヨセフに語り続ける神様のみことばに忠実に従い続けました。みことばが語られるまではエジプトから離れませんでした。

—— エジプトに留まった ——

(14、15 節)「エジプトに逃れ、ヘロデが死ぬまでそこにいた。これは主が預言者を通して、『わたしは、エジプトからわたしの子を呼び出した』と語られたことが成就するためであった。」この様に、みことばがあるまで、ヨセフはエジプトに留まり続けました。

そして、みことばがありました。

—— みことばがありました ——

(ホセア 11：1 節)「イスラエルが幼いころ、わたしは彼を愛し、エジプトからわたしの子を呼び出した。」

—— エジプトから、イスラエルの地に移動しました ——

(19～21 節)、「ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが夢で、エジプトにヨセフに現れて言った。『立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちを狙っていた者たちは死にました。』そこで、ユセフは立って幼子とその母を連れてイスラエルの地に入った。」

—— イスラエルの地から、ガリラヤ地方に退きました ——

(22 節)「しかし、アルケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行くのを恐れた。さらに、夢で警告を受けたので、ガリラヤ地方に退いた。」

—— ナザレに到着しました ——

(23 節)「そして、ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちを通して『彼はナザレ人と呼ばれる』と語られたことが成就するためであった。」

この様にしてヨセフ夫婦は、赤ちゃんのイエス様を、更に少年イエス様をしっかり守り、育てていったのでした。そんな父親がみことばに従って生きている姿を少年イエス様も見とおられたのではないかと思います。

(詩篇 119：105 節)「あなたのみことばは 私の足のともしび 私の道の光です。」

(イザヤ 55：8、9 節)「わたしの思いは、あなたがたの思いと異なり、あなたがたの道は、わたしの道と異なるからだ。-----主のことば-----天が地よりも高いように、わたしの道はあなたがたの道よりも高く、わたしの思いは、あなたがたの思いよりも高い。」

神様のみこころの道を歩みましょう。ヨセフの信仰にならいきましょう。